

## 講演台および会議用長機の試作

中神照太・見尾貞治・中村睦男

### 1. はじめに

当センターでは従来から、運搬や整理等の利便性を考慮して、組立式の木製家具の試作を行ってきた。この方針により、昨年までに事務机や本立て等を製作してきたが、今年度は、同一手法により、講演台および会議用長機の製作を行った。

### 2. 仕様と外観

試作した講演台の寸法を第1図、使用時の組上がり状態を写真1、脚部だけを写真2に示す。

ここでは、目隠し、天板および脚部が別個に作製されており、移動に際して分解でき、形状的にも重量的にもコンパクトに取り扱えるように工夫してある。

材料は、岡山県林業試験場構内で保育されていたユリノキ (*Liriodendron tulipifera* Linn.) とした。樹齢は約35年生であったが、生育が極めて良好で、台風で倒伏したときには、胸高直径は既に1000mm程に達していた。これを、当センターで板に製材した後、4年間程天然乾燥した。

天板および脚部の側板には100mm厚、その他の部位には30mm厚の板を使用した。

組上がり時の寸法は、幅1800mm、奥行き800mm、高さ1000mmとした。

仕上げ加工はポリウレタン樹脂塗料の刷毛塗りとした。

今回の試作で留意した点を以下に略記する。

今回試作した講演台では、組立部分に詰め込み等の特別な細工は施さず、目隠しと天板を脚部の上に単に置くだけとした。これは、加工手順をできるだけ簡単にしたかったこと、使用した天板等が嵩高く細かな細工が難しかったことと、後述の加工の効果を期待したことによる。

脚部上面の天板と接する部分(側板など)には、組立時の部材同士の擦れによる傷つきや天板等の変形によるガタツキを防止するため、フェルト布を張り付けた。このフェルト貼付処理と、天板のかなり大きい自重とにより、ホゾ加工なしでも、天板が使用時に脚部からずれるのを防止できると考えた。

さらに、同様の観点と、設置場所の床板の傷つき等を防止するために、脚部側板の底面にもフェルトを接着した。

自然な感じの外観とするため、天板や脚部側板は、できる限り樹皮・表皮等を残すことにした。

今回の供試材には、天乾時に顕著な乾燥割れや変色が発生していた。このため、補修部分と他の部分との色合わせが必要となった。そこで、補修部の顕在を抑え、調色等を容易にするため、全体をダークチーク色に染色した。

今回の講演台は岡山県林業試験場研修棟での使用を考慮して試作された。この研修室では、講演会以外に、講義・会議・研修等も頻繁に開催される。そこで、講演台以外への転用も考慮し、試作品に汎用性を付与するため、脚部の中棚を一般的な事務机と同じ高さに設定した。これにより、天板を外すだけで、脚部がそのまま会議用長机としても使用できることを期待した。

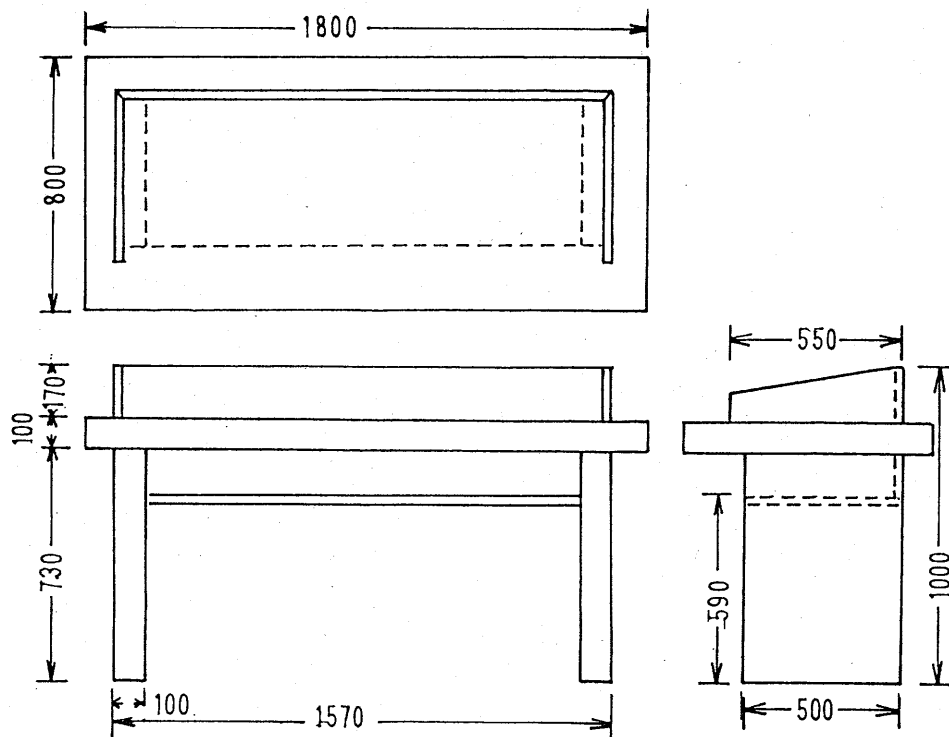
会議用長機の試作品の外観は写真3に示すように、天板と脚部だけで構成されている。

供試材はセコイヤ樹で、ユリノキと同様に林業試験場内に生育していた。樹齢もほぼ同程度である。伐倒後、板に製材され、林業試験場内で数年間天乾されてきた。

使用した板の厚さは、天板が200mm厚となっていることを除けば、他の部位は会議机の場合と同じである。

組上がり時の寸法も、高さが730mmであることだけが講演台と相違する。

仕上げ加工は、材表面に硬さを付与するためにアルキッド樹脂を使用した。また、材の心材色を活かすため、刷毛塗りによる無色の透明（クリアー）塗装とした。



第1図 講演台の寸法 (単位: mm)

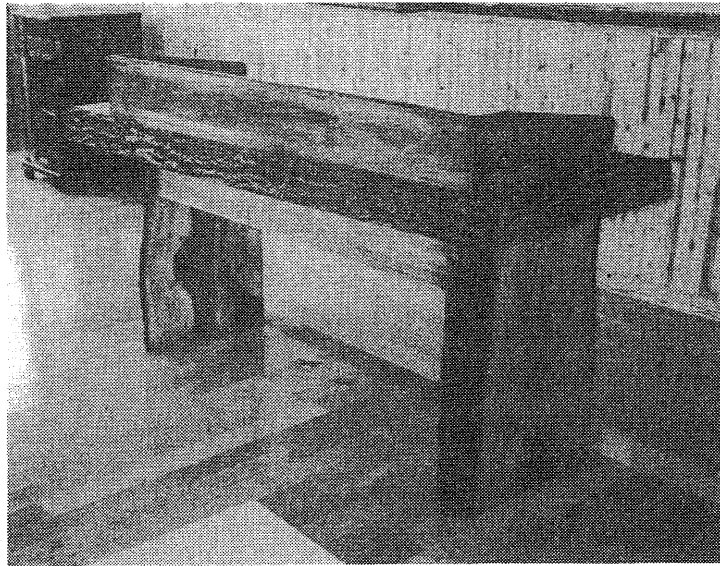


写真1 講演台  
(組上がり外観)

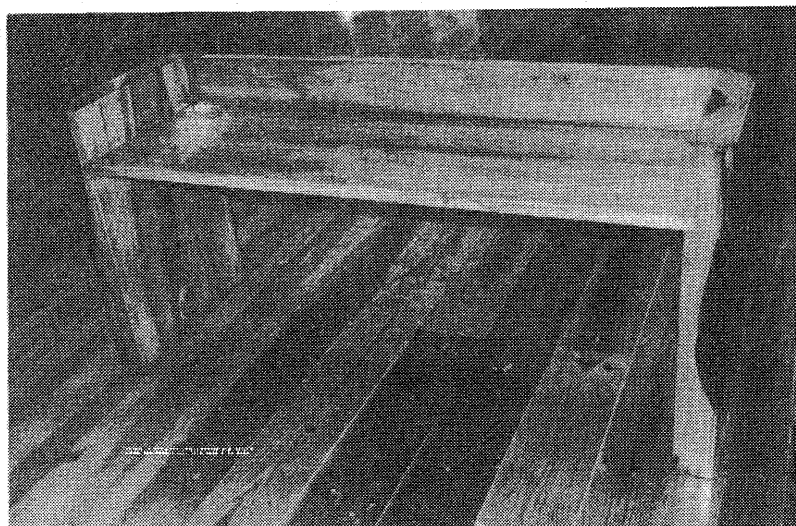


写真2 講演台脚部

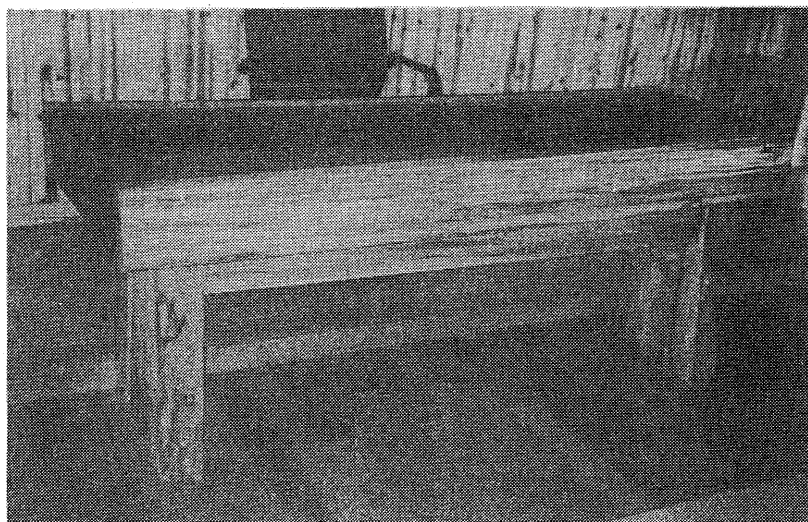


写真3 会議用長机  
(組上がり外観)